



世界の有力大学の国際化の動向①

イエール大学の国際戦略

グローバル大学への道

東京大学国際連携本部では、国際化推進長期構想の策定準備のため「世界の有力大学の国際化の動向」調査報告書を07年11月にまとめた。「大学の国際化」への気運が高まる中、世界の有力大学のグローバル化戦略とはどのようなものなのか。調査の過程から見てきたものを、今号より7回連続でレポートする。

船守美穂 東京大学 国際連携本部特任准教授

イエール大学と聞いて何を思い浮かべるだろうか。アメリカの名門校？ハーバード大学とのレガッタ？同じく名門であるハーバード大学との違いまで思い浮かぶ日本人は少ないに違いない。

イエール大学はアメリカの名門私立大学である。アメリカで3番目に古い大学で、米国で初めに設立されたハーバード大学の世俗化を批判して1701年に創設されたという。以来、イエール大学とハーバード大学は思想だけでなく、学術やスポーツ、資金規模などあらゆる面に対抗している。ハーバード大学とイエール大学のレガッタはアメリカで最初に行われた大学間の運動競技で1852年から行われている。

イエール大学は国家の指導者を多く輩出していることで知られる。この傾向は近年の30年に特に強い。ブッシュ両大統領やクリントンをはじめ、5名の米国大統領を輩出している。また、1972年以来、大統領選の候補者には必ずイエール大学の卒業生が含まれている。2008年の大統領選に出馬するヒラリー・クリントンもイエール大学のロー・スクール出身である。政治家だけではない。近年、イエール大学の副学長ポストは女性にとって著名な大学の学長になるための登竜門になりつつある。英・ケンブリッジ大学のアリソン・リチャード学長やMITのスザン・ホックフィールド学長のほか、シカゴ大学やペンシルバニア大学の初代女性学長はイエール大学の副学長経験者である。

このように米国内で名門とされ、世界大学ランキング(NewsweekやTHES(Times Higher Education Supplement)など)でも5本の指に入ることの多い世界最高峰の研究型大学であるイエール大学が、「科学と医学の強

化」となると「イエール大学の国際化」を大学の二大方針の一つに掲げている。レビン学長が2005年12月に発表した「イエール大学の国際化——新たな枠組みの構築」(要約をP51に掲載)は具体的な行動計画を人名入りで綿密に記しており、その意気込みが感じられる。

ここではイエール大学の国際戦略の目指すところと、戦略策定の背景を紹介したい。

イエール大学の国際戦略 「真にグローバルな大学」を目指して

イエール大学は、2005年12月発表の「イエール大学の国際化」戦略文書において、3つの目標、16の戦略を掲げ、これらのもとに58に上る行動計画を記し、これらの活動の帰結としてイエール大学を「グローバルな大学」の地位に高めるとしている。

戦略文書の目標には、1) 学生が指導者あるいは世界の一員として貢献できるように、その素養と資質を高めること、2) 優秀な学生と研究者を世界中から惹きつけること、そして、3) 活動の帰結としてイエール大学を「グローバルな大学」の地位に高めることが掲げられている。

世界のリーダーを育成する

この戦略文書に先立ち作成された「イエール大学と世界」という学内調査報告書の巻頭言に端的に示されているように、イエール大学にとってグローバルな大学になるということは、世界のリーダーを育成することである。

イエール大学はリーダーの育成を歴史的使命としてきた。

「イエール大学と世界」(2005年)巻頭言(抜粋)
大学設立4世紀目に入りイエール大学の目標は「真にグローバルな大学」となることである —— 米国だけでなく世界のためにリーダーを育成し、知を創出する。
リチャード・C・レビン学長による講演「グローバル大学」
(北京大学2001年5月7日)

創設時から18世紀中頃まではニュー・イングランドの植民地のためにリーダーと市民を育成している。急速に人口が拡大しつつあった19世紀中頃から米国の科学・芸術・人文社会のリーダーの育成を開始し、20世紀半ばには「ナショナル・ユニバーシティ」としての地位を確立した。そしてグローバル化が進む今日、「グローバルな大学」を目指して、世界のリーダーを育成しようとしている。

育成の対象は国内学生と世界各国の幹部

「イエール大学の国際化」戦略文書では、イエール大学に在籍する国内学生と、世界各国の幹部とを、育成の対象として想定している。

前者では学部学生を中心に想定している。イエール大学は米国の他のトップ大学に比べて「学部教育」と「リーダーの育成」に力を入れていることを特色としており、学部学生を中心に世界のリーダーを育成するという目標は、このイエール大学の特色と密接に結びついている。

後者の世界各国の幹部研修の受け皿には、学部教育やアカデミックな教育研究活動の中心である文理大学院(Graduate School of Arts and Sciences)ではなく、専門職大学院を想定している。

1. 学部教育ではトップ教師陣を揃える

世界各国の大学が国際舞台で活躍できる人材を育成するために近年、取り組みを強化しているのは短期留学プログラムの充実や奨学金の提供であるが、イエール大学は更に根本的な方策を打ち出している。

グローバルな一流大学として認知されるためには国際情勢に関して専門知識を有する教員が充実していることが不可欠であるにもかかわらず、この分野の教員が不足しているとし、国際関係の教授を新たに6名確保すると言明している。戦略文書では、そのうちの一人がEUの法と政治を専門とするアレック・ストーン・スウィートであり、現代中東研究、国際流通と金融、倫理と国際問題でさらに3名の教員を採用する人

事を進めていること、また、現代の国際情勢について政策および学識経験をもつ専門家を数名、教授職(ただしテニユアを伴わない)に就任させる予定であることなどを明記している。

2. 専門職大学院を中心に行われる世界の幹部研修

専門職大学院は従来、国内各種の専門職を育成することを使命としていたが、この軸足が世界の幹部研修へと移行しつつある。「イエール大学の国際化」戦略文書では、世界各国の最高裁判事が参加する法科大学院主催の「グローバル・コンスティテューションリズム・セミナー」や、看護大学院の行う中国の看護師のリーダーの訓練、林学・環境大学院の運営する持続可能な開発に関する研修プログラムなどが取り上げられている。

米国の大学の専門職大学院は多くの場合、独立採算が求められている。専門職大学院が率先して国外の幹部研修を実施するのは、グローバル化時代においてこれが重要な収入源になると見込まれたからであろう。

なお、世界の幹部研修には全学主催のワールドフェロー・プログラムもある。これはイエール大学が「世界のリーダーの教育の場」としての世界的評価を確立することを目的として、戦略的に開始した。

イエール大学における国際化の進め方 「トップダウン」と「部局の活力」の矛盾

「イエール大学の国際化」戦略文書を見ると、「イエール大学国際地域研究センター(YCIAS)のラニス所長とロング副学長代理は、既存のレクチャーシップ基金を活用して実務経験を持つ専門家を含む教員の採用を検討する。」「サロヴェイ・イエールカレッジ学部長はこの目標を達成するために以下の意欲的な計画を打ち出している。」など、極めて具体的な計画が人名入りで記されている。実に17名もの学内責任者の名前が、この文書の発信者であるレビン学長とロリマー副学長の名前以外に挙がっている。

これによると、イエール大学は極めてトップダウンで中央集権的な大学に見える。実際、イエール大学は私立大学であることから、国公立大学に比べると、学長のリーダーシップが発揮されやすい環境にある。しかし一方で、研究型大学は一般に教員あるいは各研究科や大学院などの活力が強さの源泉となっており、中央集権的なカルチャーはそぐわない。

この矛盾をどのように解消したのだろうか。

戦略文書を策定することの意義

国際化のための外部資金の獲得

イエール大学では、「イエール大学の国際化」をまとめるにあたり、準備段階で全部局の国際活動を丹念に調査し、先に紹介した「イエール大学と世界」という大部の冊子にまとめている。また、部局長などとの懇談や学内の協議も1年かけて実施し、各部局の意見や活動を丁寧につまみあげ東ねて、全学の国際戦略として打ち出している。

「イエール大学の国際化」は、部局や個々の教員の国際活動に「グローバルな大学」という穏やかな方向付けを与えたものなのである。

このような対処を行ったにもかかわらず、「イエール大学の国際化」を打ち出すにあたっては学内においても賛否両論があったという。イエール大学でお話を伺ったところ、実際には、まず国際化に前向きな教員や部局を中心に国際化を進めているとのことだった。

一方で、このような戦略文書を打ち出すことの意義は外部資金を獲得することにあるという。研究活動とは異なり、教員・部局単位による国際化の活動では、どうしても外部資金を獲得しにくい。戦略文書により国際化を全学的な方針として打ち出すことで、寄付などを募りやすくなったわけだ。

このように、協力的な教員や部局を中心に国際化を進め、獲得した外部資金から予算や人員の面で本部からサポートを行う。国際化を推進した教員や部局の活動が発展し、成功が見えてくれば、他の教員や部局も徐々に参加してくると考えたのだ。

米国大学の国際化の潮流 相互に結びつき、相互依存が進む世界への対応

ところで、イエール大学が「グローバル大学」を目指そうとした背景には、世界がますます相互に結びつけられるようになったことが挙げられる。経済や政治だけでなく、情報や文化、人の移動を通して世界がますます相互に結びつけられつつある。このように相互依存の増している現代の世界において、世界の活動に連結していることは決定的に重要である。米国の場合は特に、9.11同時多発テロ事件以降に鮮明となった一国主義への反省も色濃く表れている。

同様に、大学においても、国内の学生に高等教育を提供するという内部充足型のモデルでは限界がある。経済が飛躍的に伸びつつある中国をはじめとするBRICs諸国のニーズに応え、留学生を受入れたり、教育プログラムを提供したり、共同研究等を通じて課題を解決していかないことには、大学の発展は望めない。

このような潮流から、「イエール大学の国際化」戦略文書では、「interconnectedness(相互結合性)」がキーワードとなっている。

この「interconnectedness(相互結合性)」というキーワードは欧米の大学の国際化において頻りに耳にする言葉であり、イエール大学だけでなく英・ケンブリッジ大学などでもこの用語を使っている。2006年11月に開催された米国州立大学等協会(NASULGC)の第119回年次会合でも「グローバル大学」が大きく取り上げられ、「interconnectedness(相互結合性)」という言葉とともに、「Reconnecting to the world世界への再結合」という表現が用いられた。

人を通して世界と結びつき、主導権を握る

世界と関係を保ち、世界のダイナミズムと連動する方法はいろいろあるが、イエール大学は戦略的に世界各国の上層部の人材に焦点をあて、世界の動きに対して主導権を握ろうとしているように見える。これからリーダーとなる学部学生の育成、すでに一定の影響力を有する世界の幹部の研修、学術界をリードしていく優秀な留学生や研究者の獲得など、人を通して世界に影響力を持つための基盤が着実に固められつつある。

このようななか、イエール大学は中国にその焦点を合わせている。経済が急速に発展し、21世紀の主要なアクターとなることが確実である中国と連携することで、イエール大学もその恩恵にあずかろうという考えである。

実はイエール大学は歴史的に中国との結びつきが強いこともあって、現在、60名以上の教員が中国において活動している。イエール大学の知名度は中国では他の米国大学をしのいで1位、2位を争うという。イエール大学は中国における戦略的優位を活かして、アメリカ国内では実現が困難な規模の研究活動を展開している。復旦大学とのバイオ医学合同研究センターや、北京大学との植物分子遺伝学・農業生物工学合同研究センターなどが、その代表例である。無論、

中国からの留学生や研究者を受け入れるとともに、中国の幹部研修も多数実施している。

キャッチアップ型から世界連結型の国際化への転換

日本の大学において「大学の国際化」という場合は、欧米先進諸国へのキャッチアップ、もしくは、欧米先進諸国を中心に想定した国際的通用性を指す場合が多い。これに対してイエール大学、あるいは、米国の大学の言う「大学の国際化」は全く異なる。むしろ世界の活動に組み込まれるように手を打っており、いわば世界連結型の国際化を目指している。

キャッチアップ型の国際化から抜け出し、いま一度、世界の活動がどのような分野で活発になっているかを再確認し、自分の大学の果たせる役割を見直してみてもよいのではないだろうか。

自身の大学の特色を生かした国際化に向けて 「人文学と芸術」と「生物医科学」へ重点投資

「グローバルな大学」への転換で世界に王手をかけつつあるように見えるイエール大学であるが、人文学と芸術に力を入れていることは日本であまり知られていない。

イエール大学の蔵書数は1100万冊を超え、ハーバード大学に次いで世界第2位とされる。さらにイエール大学はベニンニッケ貴重書図書館をはじめとして希少本の蔵書も多数保有している。米国初となった大学付属美術館は古典から現代美術に至るまで18万点ものコレクションを有しており、ポール・メロン氏からの寄付をもとに集められた英国美術のコレクションは英国外では世界最大の規模である。美術・音楽・ドラマの分野に優れた専門職大学院を有しており、ジョディ・フォスターほか数多くのハリウッド・スターや脚本家、芸術家を輩出している。

レビン学長は4世紀目を迎えたイエール大学の今後を語るにあたり、イエール大学の学術面の強みを「人文学と芸術」と「生物医科学」にあるとし、両分野に重点投資をするとしている。「人文学と芸術」の分野については、その卓越性がイエール大学の学部教育を豊かにし、イエール大学の学部教育の強みにつながっていると説いている。これは、図書や美術のコレクションを維持、発展させ、一般に開放していけるように更に投資をしていく決意であるといえよう。また、人文と芸術の分野で卓越した人材がイエール大学に集まるように、特別の報酬

「イエール大学の国際化——新たな枠組みの構築」(要約)

目標1

相互依存がますます高まる世界において指導者あるいは世界の一人として貢献できるように、学生の素養と資質を高める。

(戦略)

- 各研究科等における現代の国際関係に関する教育・研究の強化、コースの拡充を奨励する。
- 学部学生全員が国外に留学・研究・インターンシップなどを経験できる機会を提供する。
- 大学院生向けの研究・教育予算を増額する。
- 専門職大学院の学生への各自の研究テーマに合致する国外滞在の機会を拡大する。
- グローバルイノベーション研究センターの活動の幅を広げる。
- 現在ならびに将来のリーダーのための先進的研修プログラムを開発する。

目標2

優秀な学生と研究者を世界中からイエール大学に惹きつける。

(戦略)

- 国外からの学部留学生への戦略的アプローチを行い、留学生の受入に同窓生をより効果的に動員する。
- 専門職大学院それぞれの留学生募集計画を策定する。
- 医学大学院の生物学・生物医学科(BBS)の博士課程に優秀な留学生を惹きつけ、経済的支援を行うための戦略を模索する。
- 拡大し続ける本学の留学生及び外国人研究者への支援を大幅に改善する。

目標3

活動の帰結として、イエール大学の地位をグローバルな大学に高める。

(戦略)

- (1) 教員の研究プロジェクトと創造的活動を当初から支援し、(2) 現行の図書館及び美術館の取組みを支援する。
- 全学あるいは各大学院の使命に合致する少数の国際的プロジェクトを重点的に推進する。
- 中国において一連の新規イニシアティブを開始する。
- 本学の名声の向上と国際的認知度の向上に取り組む。
- 国外におけるネットワーク構築の取組みを強化する。
- 国際化のためのインフラ整備を進める。

を提供してでも優れた人材を獲得する予定である。

イエール大学のヒヤリングの折りに聞いた「イエール大学は全米でも高く評価される音楽・芸術系の専門大学院を有している。これらの大学院はランキングなどでは評価されないが、われわれはこれをイエール大学の宝として決して手放すことはないだろう。」との言葉は印象的であった。「イエール大学の国際化」の戦略文書でも、図書館と美術館を充実させると明言している。世界のリーダーを教育するという国際化の目標も、歴史的に形成された「リーダーの育成」というイエール大学の使命に根ざしている。

やみくもに国際化を推進するのではなく、自身の大学の特色と使命を見極め、これを更に発展させる、というイエール大学の地に足のついた国際化の推進は見習うべきであろう。 ■

(参考)

"The Internationalization of Yale"
http://www.world.yale.edu/news/pdf/Internationalization_of_Yale.pdf
 「イエール大学の国際化」(和訳) (<http://dir.u-tokyo.ac.jp/kaigai/files/d-yale.pdf>)
 写真の著作権はイエール大学Michael Marslandに帰属する。